

## <調査>保母労働の実態調査：都内公立および私立 保育所の比較

著者	柘植 秀臣
雑誌名	社会労働研究
巻	13
号	2
ページ	89-120
発行年	1966-11-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00017740">http://hdl.handle.net/10114/00017740</a>

△調査▽

## 保母労働の実態調査

——都内公立および私立保育所の比較——

柘 植 秀 臣

### 目次

はじめに

一、わが国保育所の変遷

二、保母労働の内容

三、調査の対象と方法

四、実態調査の結果

A 基本調査

B 保母労働と疲労度

C 保母労働と健康問題

D 保母の意識調査

五、総括と結論

六、引用文献

附録——調査表

保母労働の実態調査

## はじめに

わが国における婦人労働の諸問題を考察するにあたって、今日の重要な課題となっているものは保育所の問題である。わが国における保育行政の貧困については多くの識者や実務者によって指摘されているが、そのなかでも保育にたづさわる保母をめぐる諸条件にかんする調査は極めて重要であるにも拘らず、従来、満足な調査が行なわれているとはいえない。保母労働にかんする調査としては、「労働の科学」(1)、日本福祉大学研究会(2)、山本等(3)、高桑等(5)による調査をあげることができるが、これらの研究は一地域的のものであったり、保母労働についての全般的考察に欠けていたり、また、公立と私立の区別のもとに調査されたものではない。

われわれは労働科学の立場にたつて、公私立の保育所に働く保母の基本調査、保母労働における疲労と健康の問題および保母の意識調査を行ない、保母労働の実態を明らかにしようとした。本調査は、当初、労働科学の立場から保母労働における疲労度の生理学的研究も行なう計画であったが、職場における時間その他の関係でこれらの調査を行なうことができず、専ら、今回はアンケート方式による調査に限った。それにしても、保母労働にかんする興味ある諸知見がえられたので、これらの結果を発表する次第である。

なお、本調査は船越久栄と田辺ヤイの手によって行なわれたもので、本論文の著者名が柘植になっているが、三名の共同研究である。本調査にあたり、貴重な助言と資料を与えて下さった吉田秀夫講師ならびに、調査の協力を得た保育所の職員の皆さんに心からの謝意をあらわしたい。

## 一、わが国の保育所の変遷

わが国の保育所は明治二三年に救貧政策の一環として認められ発足した。それ以前にも江戸時代の末期に秋田県の哲学者、佐藤信淵（一七六九—一八五〇）は、その著「垂統秘書」において貧民救済のための保育施設を各地に作るべきだと説いたといわれる（一番ヶ瀬<sup>(4)</sup>による）。彼の理念は実現しなかったが、この構想は後世の保育事業に役立った。保育所は発足以来、慈恵的な性格で運営されてきた。大正期から昭和の戦前期にかけて働かねば生きてゆけない母親が増えてきたために母親の過労や保育の欠如などが原因となって乳幼児の死亡率が高くなってきた。この時期にはそれぞれの動機で各種の保育所が作られた。例えば、官営工場や大企業では婦人労働の能率の増進をねらいとして、職場内に会社管理による託児所が作られた。また、都市のスラム街には地方公共団体が大正七年の米騒動以後の社会不安に対処するために公立保育所を設けた。また、農村では季節託児所が寺院を中心とした共同団体の中に作られた。以上のように、この時期には保育施設が急増したのであるが、同時に、保育内容も単に、預り所だけでなく生活指導の理念に基くまとまった形態を示すようになった。当時は新しいプロレタリア教育運動を背景にしたところの無産者託児所もできて、保育活動は活発に進んだ。つまり、社会事業としての保育施設が上から作られてゆく中で、子供本位の新しい保育所も下から芽をふいていたのである。しかし、日本の軍国主義化の時代（昭和十年）に入ると、教育活動は打撃を受けた。昭和十二年には国家総動員法が施かれ、婦人も動員され、そのための保育所が必要となった。終戦まぎわには保育所、幼稚園ともに全部、戦時託児所となった。戦後、占領政策の下で、昭和二二年に児童福祉法が制定されて、保育所は児童一般を対象とする児童福祉施設の一つとして国家的規模のもとに法的に制定された。そして、託児所の名称も廃止されて、保育所と呼ぶようになった。しかし、今もなお保育所は幼稚園と区別され、児童保護的な性格を多分に残しているのである。現行法による幼稚園と保育所の区別は次に示すとおりである（徳

永(6)を参照)。

	保 育 所	幼 稚 園
保育内容	児童福祉法に基く最低基準	学校教育法に基く教育要領
保育対象	保育に欠ける乳児・幼児	満三才〜学齡迄の幼児
保育時間	一日八時間を原則とする	一日四時間
経営面	自治体の長が措置権をもち、公的負担あり	公的委託契約なく、すべて保護者負担
保 育 者	保 母	教 諭
監督官庁	厚生省	文 部 省

以上、簡単にみたように、我国における保育政策は社会状況の変化によって幾多の変化をとげてきたが、第二次大戦後になって漸く、保育問題も託児中心の精神から脱却して、児童教育の面からも考えられるようになった。したがって、保母労働に教育労働者の性格が附加されてきている。

## 二、保母労働の内容

保母とは施設で直接児童の保育にたずさわる女子であり、保育とは保護と養育を共に行ない、児童の生活指導に当るものである。従って、保育の目的は「児童の健全な心身の育成」や「有益な社会人を形成する事」である。この目的のために児童の健康と安全をはかり、良い習慣と性格の育成をめざし、更に能力の伸長を促すように、保母は児童

を指導するのである。保母は所長の下で諸職員（医師、栄養士、炊事婦等）の協力をえて保育にあたる。保母によって行なわれる生活指導はつぎに掲げる六領域からなっている。

第1表 東京都公立某保育所のデーリープログラム

時 間	仕 事 の 内 容
七・〇〇	早出当番の出勤（環境を整えて全職員が出勤する）
八・三〇	全員出勤 午前中の保育計画にそって保育する。 自由遊び・集団保育にて安全、健康、躰等の指導をする。
一一・三〇	食事の準備
一二・〇〇	食事をさせる（保母も一緒に食べる）
一三・〇〇	食事の後仕末、部屋の掃除
一四・〇〇	午睡の準備（布団敷・着換を手伝う）
一五・四五	午睡
一六・〇〇	おやつ、帰宅準備
一六・三〇	一般児童を帰宅させる 保育所の掃除、洗濯 原則として保母は勤務終了となる 遅出当番は、残留児保育をする 保護者が迎えに来るまでで、ふつうは一八時半位まで、遅い時は一九時をこえる時もある。

保母労働の実態調査

- 健康状態を観察する
  - 個別検査をする（清潔、外傷等）
  - 自由遊びの指導
  - 午睡の世話
  - 健康診断を行なう（少なくとも年二回）
  - 自然に親しませる
- この六領域に基いて、具体的な保育計画がたてられるのである。保母の保育所内での仕事は第1表に示すとおりである（保育所によって多少の相違はある）。また、保母の仕事は児童の直接生活指導の他に次のものがある。
- 保育事務（日記記入、保育計画立案、児童票の記入等）
  - 一般事務（経理、庶務）
  - 保育準備（教材の整理）

## 二、職員打合せ会

ホ、家庭指導（家庭訪問、保護者会、文書連絡等）

へ、施設の設備、備品の管理や修理

現在、認可保育所に勤めている保母の数は全国で約三七、〇〇〇人であり、他に未認可保育所の保母が約一〇、〇〇〇人いるといわれている<sup>(7)</sup>。

## 三、調査の対象と方法

保母労働にかんする予備知識を得るために、共同研究者船越と田辺は、都内三ヶ所の保育所で助手として働き、また多くの保母から体験を聴取して、保母の労働内容を熟知することにつとめた。それらの経験にもとづいて本論末尾に添附した別表のような調査表を作成した。

調査表に示されているように、調査内容は保母に関しての基本的調査、労働条件、及び疲労度に関するもの、意識に関するものであった。調査の対象となったのは、代用保母も含み、広義の保母であった。したがって、有資格保母、無資格保母、あるいは認可保育所の保母、無認可保育所の保母を問わずに調査表を配布した。調査の範囲は、都内二区にわたり、一保育所に三～五部ずつ直接保母に手渡して約一週間後に回収した。調査は昭和四〇年五月から六月にかけて行なった。対象となった保育所は公立三二ヶ所、私立三八ヶ所、配布部数は二五六部で、有効回収部数、約二二〇部、すなわち、回収率八〇%強であった。そのうち、本調査では主として、二〇〇部（公立保育所一〇〇部、私立保育所一〇〇部）を使用した。記入には無記名式を用いた。一般に、調査に対し、保母達は非常に協力的であっ

たし、また比較的学歴が高いので、調査内容をよく理解できたと考えられ、したがって調査データの信頼性は十分高いものと推察された。

#### 四、実態調査の結果

##### A 基本調査

①年令——保母の年令は資格取得との関係もあって、平均年令は二八・九才であり、一般女子労働者の平均年令が二四～二五才であるのに対し、高令となっている。第2表は、公私立の保母の年代別人員を示したものである。私立では四十才以上の人が一七%を占めている。このことは後でふれるが、この年代の保母は無資格者の場合が多い。

第2表 保母の年令

年令 (才)	公立%	私立%	平均%
17 ~ 20	0	4	2
20 ~ 23	17	23	20
23 ~ 26	24	22	23
26 ~ 30	21	16	18.5
30 ~ 35	24	7	15.5
35 ~ 40	8	10	9
40 ~ 45	1	13	7
45 ~	0	4	2
無 解 答	5	1	3
合 計	100	100	100

保母労働の実態調査

第3表 保母の最終学歴

最終 学歴	公立%	私立%	平均%
中 学 校	1	9	5
高 学 校	19	20	19.5
短大 (保母)	78	62	70
大 学	2	6	4
そ の 他	0	1	0.5
無 解 答	0	2	1
合 計	100	100	100

第4表 保母資格の有無

	公立%	私立%	平均%
保母の資格有	97	65	81
ク ク 無	3	30	16.5
無 解 答	0	5	2.5
合 計	100	100	100



②学歴——保母の学歴は一般に高く、短期大学卒業以上が七四％である。これは一般に短大の保育科等で資格を得るからである。公立と私立を比較した場合、私立では中学卒が九％もいるのに対し、公立ではわずか一％である（第3表）。

③資格——資格を得るためには厚生大臣の指定する保母の養成学校、その他の施設を卒業するか、又は国の保母試験に合格しなければならない。そのような資格をもっていて、はじめて正式の保母として認められるのである。そこで資格の有無について調べてみた。第4表からわかる通り、公立においてはほぼ全員が有資格者であるのにたいして、私立では有資格者は六五％にすぎず、無資格者が三〇％もいる（ただし無資格者の中には資格取得中の人もいる）。

④地位——保育所で直接保育にあたる職員を保母と呼んでいるが、実際の保育所内での地位は四種類に分けられている。すなわち、主任保母、保母、代用保母、助手である。保母は保母資格をもっている者で、乳児十人につき一人以上、幼児三〇人につき一人の割合いで配置されることになっている。この最底基準で規定する数の保母をおくことができない場合に限り、保母に代る女子（代用保母）をおくことができる。ただしその数は最底基準で規定する数の三分の一に限られている。

代用保母とはつぎの規準によっている。(イ)保母を養成する学校その他の施設に一年以上在学したもの、(ロ)中学校又は高等学校を卒業したもの、又は文部大臣によって同等の資格を有すると認められたものであり、児童福祉施設に一年以上児童の保護に努めたもの、又は厚生大臣の指定する講習課程を終了したもの、(ハ)保母試験に四課目以上合格しているもの。この条件の何れかに該当する者を代用保母というのであるから、その資格は多様である。なお、主任保

第5表 保育所内での地位

	公立%	私立%	平均 年令
主任保母	12	10	35.5
保母	84	59	27
代用保母	0	13	32.3
助手	1	14	28
無解答	3	4	
合計	100	100	

第6表 保母の経験年数

経験年数	公立%	私立%	平均 年
0～1	14	23	18.5
1～2	16	21	18.5
2～3	6	7	6.5
3～5	10	11	10.5
5～8	22	17	19.5
8～10	11	0	5.5
10～15	18	10	14
15～	1	7	4
無解答	2	4	3
合計	100	100	100

第7表 地位と平均経験年数

地位	平均経験年数
主任保母	13.5年
保母	5.5
代用保母	3.6
助手	0.9

母というのは園長の次にくる保育責任者で、一般の保母の監督の役(リーダー)である。法的には規定がないが、主任保母は経験年数十三年位の人が多い。資格の有無からいうと、主任保母と保母は有資格者、代用保母と助手は無資格者である。保母の地位別構成の割合は第5表に示すとおりである。表からもわかるように、全体の七〇%がいわゆる保母である。しかし私立には代用保母や助手が多い事実は見逃がせないことである。主任保母は公私とも一〇%程度である。私立に代用保母、助手が多いということは私立の労働条件が悪いのでやめていく人が多く、その不足分を無資格者でうめざるを得ないことと、無資格者だと賃金も安くてすむので予算不足の保育所は概して、これらの人を雇っているのである。無資格保母が増えつつある傾向はとくに幼児の教育内容の低下をもたらす危険性を含んでいる。

⑤経験年数——保母経験の平均は公立で五・二年、私立は五・七年である。第6表からもわかるように経験年数〇～二年の者が全体の三分の一を占めており、二～五年経験者は少くなっている。しかし又、五～八年の経験者は多

くなっている。二、五年目あたりにやめるといふのはどの職場でも見られる傾向であろう。すなわち、その原因は結婚問題や倦怠期に入るためといわれている。調査によると、保母の結婚年齢は二六、二七才である。しかし、保母の経験年数は幼稚園教諭に比べると短くなっている。(幼稚園教諭の経験年数の平均は六・五年——東京都保育所労組三十六年度調べ。)この事實は、やはり保育所の労働諸条件のきびしさに基づくものと思われる。しかし、経験年数一〇年以上のベテランが相当いるのも事實である。今から一〇年、一五年前は、日本民主化に呼応して、保育活動も活発に進んだ時期である。そうした中で、保育事業にたいする信念をもつ意識の高い保母が生れ、今もなお活動しているものと思われる。

経験年数を公立と私立とで比較してみると、経験年数一年未満の人は私立に多い。つまりやめてしまう人や新しく

第8表 現在の給料でやっ  
てゆけますか

	公立%	私立%	平均%
大体やれる	34	21	27.5
普通	32	14	23
時々不足	20	21	20.5
毎月不足	9	34	26
無解答	5	10	7.5
合計	100	100	100

第9表 手当てを含めた月平均額

賃金 (単位円)	公立	私立	
		(有)資格	(無)資格
～12,000	1	0	2
12,001～15,000	0	1	19
15,001～18,000	3	20	7
18,001～20,000	7	11	1
20,001～22,000	20	13	1
22,001～24,000	12	5	0
24,001～26,000	8	0	1
26,001～30,000	22	3	0
30,001～40,000	18	0	0
40,000～	3	0	0
無解答	6	5	6
合計	100%	100%	

入って来る人の交替の度合が高いのである。次に当然のことながら地位別による平均経験年数は地位の高い程、経験年数が高くなっている(第7表)。

⑥賃金——資格として短大卒相当の学歴を要求されておりながら、保母の賃金

第10表 経験年数と賃金

経験年数	公 立	私 立
1 年 未 満	22,500 円	15,500 円
1 ～ 5 年	27,700	17,300
5 ～ 10 年	30,200	18,100
10 年 以 上	37,700	24,000

第11表 地位と賃金

地 位	賃 金
主 任	31,500 円
保 母	22,800
代 用 保 母	15,600
助 手	14,400

関係上、さほど深刻な問題はないようである。賃金の面だけでは公立の方が恵まれているといえよう。第9表、第10表において公立と私立の賃金格差が示されている。

第10表のとおり、一年未満の経験で七、〇〇〇円の差があり、それが五～八年ともなると一〇、〇〇〇円以上も違ってくる。私立では十年働いても二〇、〇〇〇円足らずという状態である。保育所では残業手当やボーナスが保障されているところはまれであり、定期昇給も定められていないという不安定な状態におかれている。地位別平均賃金は第11表の如くである。この表は公立、私立混同の平均額であるから実際には私立の場合はいっと低いはずである。

⑦家族構成——未、既婚の割合いと子供数にかんする調査の結果は、未婚者が五八%、既婚者は三八%、無記入四%である。既婚者については共稼ぎが九二%を占めており、子供をもつ者が五五%、もたない者が四五%である。子供をもつ者は最高三人であり、平均は一・五人である。

## B 保母労働と疲労度

第12表 通常日の労働時間

労働時間\	公立%	私立%	平均%
7時間30分	0	9	4.5
8	3	41	22
8 30	10	24	17
9	80	18	49
9 30	5	2	3.5
無 解 答	2	6	4
合 計	100	100	100

第13表 早番日の労働時間

労働時間\	公立%	私立%	平均%
7時間30分	0	7	3.5
8	10	24	17
8 30	20	21	20.5
9	40	13	26.5
9 30	5	9	7
10時間以上	23	6	14.5
なし・無解答	2	20	11
合 計	100	100	100

第14表 早番日の回数

日数\	公立%	私立%	平均%
7日に1日	65	44	54.5
7日に2日	1	13	7
10日に1日	17	5	11
14日に1日	15	2	8.5
14日に3日	2	5	3.5
なし・無解答	0	31	15.5
合 計	100	100	100

①労働時間——保育所保育母の勤務には通常日勤務の他に早番日出勤、遅番日出勤などがある。

(a) 通常日の労働時間

通常日の労働時間は公立で平均九時間、私立では八時間三〇分である。労働時間は保育所によって異なるが、短い所と長い所とは二時間位の差がある。

(b) 早番日の労働時間

早番日は朝七時三〇分～八時から勤務を始め、終了は夕方の四時～五時三〇分となっている。従って労働時間は通常日と同じで八時間三〇分～九時間の所が多い。しかし公立においては早番日に一〇時間以上も働いている人が二三%もいる。つまり、早く出勤しても帰るのは通常日と変らなく一時間余りの長時間労働であるという事である。この点、私立においては早番日は公立の場合ほどには負担になっていないようである。早番日は大体、平均、週一回の割

第17表 遅番日の労働時間

労働時間	公立%	私立%	平均%
7時間30分	0	9	4.5
8時間	3	16	9.5
8時間30分	6	21	13.5
9時間	24	17	20.5
9時間30分	36	7	21.5
10時間	24	4	14
10時間以上	4	0	2
なし・無解答	3	26	14.5
合 計	100	100	100

第18表 遅番日の回数

日数	公立%	私立%	平均%
7日に1日	55	40	47.5
7日に2日	2	15	8.5
7日に3日	0	2	1
10日に1日	15	2	8.5
14日に1日	15	2	8.5
14日に3日	1	6	3.5
なし・無解答	12	33	22.5
合 計	100	100	100

第15表 早番日の出勤時間

	公立%	私立%
a. m.		
7:00	4	0
7:30	80	55
8:00	60	31
8:30	0	14
合 計	100	100

第16表 早番日の退出時間

	公立%	私立%
p. m.		
2:00	0	2
2:30	0	0
3:00	0	2
3:30	0	8
4:00	20	32
4:30	39	29
5:00	5	21
5:30	32	4
6:00	3	2
6:30	1	0
合 計	100	100

合で交代されている(第13、14、15、16表参照)。

(c) 遅番日の労働時間

遅番日は朝八時三〇分～九時三〇分頃に勤務につく。そして夕方五時三〇分～六時三〇分迄働く。ところが遅い所では七時を過ぎてもまだ勤務終了とならない場合もある。これは児童の親達が子供を迎えに来るまでいつまでも待っていないければならぬからであり、したがって時間的にルーズになることが多い。遅番日の労働時間は公立、私立ともに通常日、早番日に比べると、最も長時間労働となっている。とくに公立では九時間、九時三〇分、一〇時間労働は一般で、保母の労働時間の長さは

第19表 遅番日の出勤時間

	公 立 %	私 立 %
a. m.		
8 : 00	4	4
8 : 30	79	21
9 : 00	17	40
9 : 30	0	35
合 計	100	100

第20表 遅番日の退出時間

	公 立 %	私 立 %
p. m.		
4 : 00	0	1
4 : 30	0	10
5 : 00	1	15
5 : 30	9	36
6 : 00	59	31
6 : 30	29	7
7 : 00	1	0
7 : 30	1	0
合 計	100	100

が一日ずつあるというのが一般の保育所の実情である。

②休憩時間——休憩は仕事の間に適当にはさまれる短い休止であり、休憩によって疲労が回復されねばならない。

ところが保育所では休憩時間が全然ない所が半数以上もあり、たとえあったとしてもせいぜい三〇分であり、それも公立、私立とも「午睡の時に幼児と一緒に」休息するという程度で、純然たる休憩となっていない。だから本当の意味での休憩は保母には全くなくて、一日中休みなして働いている状態である（第21、22表参照）。

昼食時間について調べたところ「ゆっくり食べられる」と答えた人は全体の二二%であり、他の七〇%余りは昼食のための特定の時間がない状態にある。昼食は児童の食事時間に児童と一緒にする場合が多く、その時あれこれと児童の世話に追われるからゆっくり食べることができないのである。食事時間は唯食べるだけの時間でなく食物の消化を考慮した時間でなければならないが、この点からすれば保母には正当な昼食時間がないといえる。

をはっきり物語っている。遅番日の出勤時間は早番日と同じく七日に一度の割合が多い（第17、18、19、20表参照）。

以上の如く保母の労働時間は一週七日の内曜日を除いた残りの六日間のうち、四日間は九時間労働の通常日勤務であり、他は早番日勤務の九時間～十時間労働と九時間三〇分～一〇時間を越える遅番日勤務

第21表 休憩時間

休憩時間／	公立%	私立%	平均%
0 ～ 10 分	11	6	8.5
11 ～ 20	17	1	9
21 ～ 30	7	24	15.5
31 ～ 40	1	1	1
41 ～ 50	5	9	7
51 ～ 60	0	7	3.5
なし・無解答	59	52	55.5
合 計	100	100	100

第22表 休憩方法

	公立%	私立%	平均%
交 代 制	5	6	5.5
一 斉	0	7	3.5
午 睡 の 時	42	32	37
勤務中適当に	4	15	9.5
そ の 他	2	4	3
なし・無解答	47	36	41.5
合 計	100	100	100

第23表 昼食はゆっくり食べられますか

	公立%	私立%	平均%
は い	20	23	21.5
ま ち	20	28	24
い い	57	48	52.5
無 解 答	3	1	2
合 計	100	100	100

## ③児童の受持ちと疲労

—— 保母の仕事は子供を保育するということに変りはないが、具体的な仕事となると受持ちによって多少の相違がある。受持ちは大きく分けて乳児担当と幼児担当とに分けることができる。乳児（〇才～三才）担当は授乳からおむつの世話までが仕事の中に入っている。幼児（三才～六才）担当は集会や遊戯の指導、その相手をするのが仕事の中心となる。保母の疲労は受持ち児童数の多少によって左右されるといわれている。現在の制度では児童福祉法最低基準によって保母一人あたりの担当児童数は乳児八人、幼児三〇人となっているが、この数は多すぎるといわれている。保母の過労と児童の事故防止のために全国社会福祉事業従業者団体が担当児童数改正の要求を出しているので参考までにあげておこう（第24表参照）。

今回の調査では受持ち別に疲労のあらわれ方を下記の項目について調べてみた。なお、受持ちのうちわけは乳児担当者六八名、幼児担当者一〇四名、不明及び無記入者二八名、合計二〇〇名となっている。



第24表 現行受持ち児童数の基準と改正要求基準

児童の年令	現行基準	改正要求基準
二才児未満	八人に一人	五人に一人
二才児	八人に一人	五人に一人
三才児	三十人に一人	十五人に一人
四才児	三十人に一人	二十人に一人
四才児以上	三十人に一人	二十人に一人

第25表 勤務中何をしている時一番疲れますか

仕事	受け持ち	乳児係%	幼児係%	平均%
自由遊び		20	20	20
布団敷き		5	8	6.5
掃除		11	3	7
食事		2	5	3.5
遊戯		3	3	3
残留児保育		0	3	1.5
排泄他入		7	0	3.5
その記		8	5	6.5
無記		44	53	48.5
合	計	100	100	100

(a) 勤務中何をしている時一番疲れますか

第25表で示すとおり乳児、幼児担当者とも圧倒的に訴えの多いのは「自由遊び」である。自由遊びというのは子供を戸外等で勝手に遊ばせてその監督をすることである。一見すると楽な仕事と思えるが、これは子供が遊び中に怪我をしないか、喧嘩をしていないかと気を使うために精神的に疲れるのである。布団敷き、掃除の仕事も訴えが多い。とくに乳幼児担当に「掃除」が多いのは洗濯が含まれているからである。保育所によっては洗濯婦がいる所もあるが、大抵の所では保母は保育の仕事以外にも沢山の雑用をやらなければならないのである。

(b) 体のどの部分が疲れますか

第26表で示すように足、背中、肩、のど、全身という順で訴えが多い。一日中、子供と共に動きまわる保母は肉体的にも相当疲れるという事実を明確に示している。中でも「のどが疲れる」とか「声が出なくなる」という訴えが多

第26表 体のどの部分が疲れますか

受持	乳児係%	幼児係%	平均%
頭首	5	11	8
肩	0	1	0.5
中	11	14	12.5
背	15	11	13
手腰	3	0	1.5
足目	14	10	12
ど身計	21	24	22.5
の全合	6	6	6
	15	9	12
	10	14	12
	100	100	100

第27表 何曜日に疲れを感じますか

曜日	公立%	私立%	平均%
月	11	17	14
火	0	0	0
水	4	0	2
木	44	39	41.5
金	38	40	39
土	3	4	3.5
合計	100	100	100

第28表 何月頃疲れを感じますか

	公立%	私立%	平均%
1月	1	0	0.5
2月	3	0	1.5
3月	9	7	8
4月	14	12	13
5月	9	12	10.5
6月	18	11	14.5
7月	16	19	17.5
8月	17	21	19
9月	5	8	6.5
10月	0	4	2
11月	1	0	0.5
12月	7	6	6.5
合計	100	100	100

い。これは保育所内の騒音のためと、絶えず声をはりあげるためであろう。保育所の騒音は平均六五ホーンあるといわれる。子供が泣いたり、騒いだりする中で、保母は子供を制したり、自分の話を理解させ保育を行なわなければならない。騒音は精神的負担と共に、肉体的にも高音を発することによって直接「のど」を痛めるといように保育所保母の疲労問題を取扱う場合に無視できない問題である。

④週間、月間の疲労——第27表に示すとおり、保母の疲労も一般労働者の疲労と同じく、木、金曜日に疲れを訴える人が多い。それに対して水曜日が一番快調な日である。土曜日に訴えの少いのは多分に気分的なもので肉体的には疲れているものと思われる。年間を通じての疲労は暑さと湿度の高い六月～九月にかけて強く感じられ、夏は消化器官も弱る時であるので、尚更疲れるのであろう。保母にとっては四月から六月頃にかけて疲れが特長的にあらわれてくるものと思われる。

第29表 自覚的疲労調査

肉 体 的 疲 勞		精 神 的 疲 勞		神 經 感 覺 的 疲 勞	
頭が重い	72	頭がぼんやりする	72	目が疲れる	90
頭が痛い	55	考えがまとまらない	72	目が乾く	6
全身がだるい	107	一人でいたい	60	動作がぎこちなくなる	27
体のどこかがだるい	78	いらいらする	69	ふらつく	35
肩がこる	107	ねむくなる	98	味が変わる	11
息苦しい	19	気が散る	43	めまいがする	62
足がだるい	119	物事に熱心になれぬ	41	まぶたやその他の筋がピクピクする	79
つばが出ない	2	ど忘れする	94	耳なりがする	27
あくびが出る	89	する事に自信がない	44	手足がふるえる	18
冷汗が出る	12	物事が気にかかる	70	きちんとしていられない	26
計	658	計	663	計	381

保母労働の実態調査

(数字は回答数の総和である)

第30表 睡眠時間

時間	未婚%	既婚%	平均%
～ 6	29	28	28.5
6 ～ 7	44	54	49
7 ～ 8	27	18	22.5
無 解 答	0	0	0
合 計	100	100	100

第31表 最近の健康状態

	未婚%	既婚%	平均%
良 い	13	12	12.5
ふ つ う	58	59	58.5
悪 い	22	22	22
無 解 答	7	7	7
合 計	100	100	100

①睡眠時間——疲労回復にとって最も重要な要素は睡眠である。睡眠は時間の長さとは睡眠度の問題から取りあげられねばならないが、ここでは一応の目安として睡眠時間について調査した。第30表からもわ

### C 保母労働と健康問題

⑤自覚的疲労——自覚的疲労調査の結果は、第29表のようになった。肉体的疲労は先に述べた「体のどの部分が疲れますか」の答えと同様に全身がだるい、肩がこる、足がだるい等の訴えが多い。保母労働の疲労は肉体的、精神的疲労と共に神経感覚的疲労度も高いようである。

第32表 経験年数と病気 (%)

経験年数	病名	呼吸器害	胃腸	肩こり 神経痛	貧血 冷え症	頭痛	眼疾	その他	無解答	合計
1年未満		43	11	3	0	1	0	6	34	100
1～5年		39	13	5	7	0	1	6	29	100
5年以上		28	15	7	4	2	2	13	29	100

かるように約半数の人が六時間～七時間の睡眠である。これで熟睡しているならば問題はないが、六時間未満の人が三〇%もいることは問題である。保母達は夜遅くまで家事や勉強に追われてゆっくり眠る時間がないのが一般であろう。未婚、既婚別に見ると、七時間以上眠れるのはやはり未婚に多い。当然ではあるが、既婚者は家庭生活を維持

してゆく上でどうしても、未婚者よりも何かと負担がかかっているといわねばならない。

## ②健康状態

保母の最近の健康状態は第31表で示すとおり、「良い」と答えた人は全体の二〇%余りもいる。健全な保育は健康な保母によってなされるわけであるが、現実には健康な保母が少いといえよう。保母のかかりやすい病気には「呼吸器系の障害」が多い。具体的には「声が枯れた」「のどが痛みやすい」「風邪を引きやすい」等である。

「胃腸障害もかなり多い。これは多忙と不規則な職場生活が根本的な原因と思われる。なお、よく使用する薬はビタミン剤、風邪薬、胃腸薬、トクホ

## ③生理

生理は一四才～一五才頃から四七才～八才の更年期になるまでの間、周期的な子宮出血を繰返すもので、女子にとって特有な生理現象である

第33表 よく使用する薬

薬品名	比率 %
剤薬薬薬類他計	32
ン	20
ミ腸邪痛ホ	20
タ	10
ク	16
ビ胃風頭トそ合	2
	100

から、保母労働を考察する上で重要な問題である。生理の周期は大体二八日前後をもって訪れ、出血持続日数は三

第34表 生理時の苦痛の有無

	公立%	私立%	平均%
有	59	46	52.5
無	32	43	37.5
無解答	9	11	10
合計	100	100	100

第35表 生理時の症状

	公立	私立	平均
気分が落ちつかぬ	6	6	6
腰痛	25	20	22.5
頭痛	14	8	11
腹痛	31	29	30
イライラする	14	15	14.5
全身倦怠感	29	17	23
下痢	6	2	4
胸苦しい	1	2	1.5
その他	3	2	2.5
合計	129	101	115

(数字は回答数の総和である)

第36表 生理休暇をとりますか

	公立	私立	平均%
はい	7	2	4.5
いいえ	86	91	89.0
時々とる	4	5	4.5
無解答	3	2	2.5
合計	100	100	100

(苦痛有りの人のみに問)

第37表 休暇をとらない理由

	公立	私立	平均%
人手不足	20	20	20
とる必要なし	12	16	14
前歴がない	9	14	11.5
認められていない	2	0	1
何となく	3	4	3.5
無解答	54	46	50
合計	100	100	100

(苦痛の有無にかかわらない)

五日、出血量は五〇〜一〇〇グラムを越え、多かれ少なかれ局所及び全身に何らかの苦痛を伴うのが普通である。働く女性は社会的に有用な物資を生産する現実の労働力であると共に、次代の国民を生み育てる母性でもあるわけで、妊娠、分娩、哺乳の順当な過程を破壊することは許されない。したがって婦人労働者には母性保護法規が定められている。生理に関しては労働基準法で「生理日の就業が著しく困難な女子や生理に有害な業務に就業している女子が請求した場合は生理休暇を与えなければならない」と定められている。生理中は特に仕事を休む必要はないが、重労働や有害作業はさなければならない。また、必要に応じて仕事を中断することも大切である。

第38表 勤務終了後何をしますか

	未婚%	既婚%	平均%
休息	18	14	16
家事	24	52	39
娯楽	7	4	5.5
読書	15	9	12
習い事	7	3	5
保育準備	17	16	16.5
その他	10	2	6
解答	2	0	1
合計	100	100	100

第39表 休日は何をしますか

	未婚%	既婚%	平均%
休息	23	18	20.5
家事	19	37	28
娯楽	10	10	10
読書	5	6	5.5
買い物	15	13	14
スポーツ	5	2	3.5
習い事	3	1	2
その他	17	11	14
解答	3	2	2.5
合計	100	100	100

保母の生理時の問題はどうか。この点について調べたところ、生理中の苦痛を訴える人は五三%もいる。その苦痛が労働の姿勢、環境から来るものか、あるいは全く個人的な原因なのかは不明である。しかし、いずれにしても半数の人は何らかの苦痛を感じている訳である。「症状はどんなですか」という問に対しての答えは、第35表に示すように、保母だからといって特別変っていることはなく、一般女子と同じように腹痛、腰痛、全身倦怠感等の訴えが多い。「気分がおちつかぬ」「イライラする」は子供に良い影響を与えるわけがなく、たとえ生理休暇を取らなくとも細心の注意を払って保育にあたることが要求されるので、この問題は深刻といわねばならない。生理休暇については、苦痛があるのにもかかわらず、生理休暇をとる人は全体の一割にも満たない。その理由は「人手不足」が圧倒的に多く、「前例がない」「認められていない」等も多い。これらの事実は生理休暇にたいする真の意義が理解されていないことと同時に、人手不足という現実には保育所がかかえている悩みをきびしく物語っているのである。生理休暇は

女子労働者にとっては正当の権利であるから、保母もこだわることなく取ることができるようにならなければならない。と同時に保母自身の自覚の向上が望まれるのである。

④職場以外の生活 — 第38表からもわかるように、未婚、

既婚を問わず勤務終了後は家庭で「家事」に従事する人が多い。とくに既婚者は半数の人が家事に追われている。休息・保育準備・読書等も多い。休息・読書はうなずけるが、保育準備・勉強の時間は保母に要求される特有の生活時間であろう。これは意慾があつてやっているのか、あるいは保育所内では時間的にゆっくり準備をしたり、勉強ができないから家庭に持ち帰ってまでやっているのかは明らかにすることができなかったが、恐らく後者であろう。保母にもっと時間的なゆとりを与えなければならぬだろう。そして家庭ではゆっくりと休養すべきであると考ええる。次に「休日は何をしますか」という問に対しての答えは、第39表に表われたように、圧倒的に「家事」が多い。また「買物」の多いのは通常日では時間的にいそがしくてまとまった買物ができないからであろう。「その他」というのはサークル活動・教会・親戚訪問等である。その中でもサークル活動の参加は予想外に多い。

#### D 保母の意識調査

保母労働の調査の一環として、下記の項目について意識調査を行なつてみた。

①保母志願の動機——保母は原則として資格を有する職業である。それだけに誰にでもできるという性質のもではなく、一時的な思いつきからその職業を選ぶということはあまりないはずである。そこで保母志願の動機を記入式で答えてもらうことにした。志願の動機は一つとは限らないで、種々の要素からなっているものと思われるが、第40表で表われたように、大体において「子供が好きであるから」という回答が一番多かった。次に「社会に役立ちたい」という人が多いことは、献身的あるいは前向きな生活態度をもつて保母という職業にその価値を見い出しているのである。保母に関しては他の職業選択に見られるような「給料がよいから」とか、「仕事が楽であるから」という考え方は全然見られない。中には「何となくなった」という人達もいるが、これはどの職業においても見うけられ

第40表 保母志願の動機

子供が好き、興味を感じた	社会に役立ちたい（保母不足をみかねた、恵まれない子を守ってあげたい）	女性の適職である	生活の手段、資格を取得したい	何となく、人に勧められた	幼児教育の意義を知った	自分の趣味、才能を生かす	その他（母が保母、あこがれ）	合 計
30%	20%	11%	13%	8%	7%	6%	5%	100
27%	19%	10%	7%	10%	10%	10%	7%	100
28.5%	19.5%	10.5%	10%	9%	8.5%	8%	6%	100

る共通のことである。要するに、保母の場合は真剣に考えて保母という職業を選んだということがうかがえよう。

②仕事で楽しい事、嫌な事——保母生活で楽しい事はやはり子供を中心とした生活であり、公立・私立とも大体同じ傾向にある。保母生活で嫌な事は人間関係の不満足のうちに見出される。即ち、同僚とのトラブルであったり、無理解な父兄との人間関係に悩んでいる保母が多いことである。他に嫌な事は雑用の多いことや、賃金の不満を訴える人も多い。公立・私立を比較してみると「子供のけが」、「教育面で自信のない事」、「設備の不備」等が私立の場合に目立つ嫌な点としてあげられる。このことは私立の設備の不完全さ、更に無資

格者が多い故の教育に対する自信のなさをあらわしている。嫌な事の項目にあげられた問題は、今日の保育所のかかえている問題を具体的に映しだしているといえよう。「子供のけが」の防止等は人手を増すとか、設備の改善によらなければならぬものである。

③転職、移動の希望——保母の労働条件が非常に悪いことはすでに見たとおりである。そして、保母の仕事は非常に過重である。保育予算の面でも思うようにならない。そんな現実の中で保母は働いているのである。そこで保母達は転職、移動問題をどのように考えているのであろうか、どの方面に、何故に移りたいかについて調査した。予想



第41表 保母生活で楽しいこと、嫌なこと

楽しいこと、嫌なこと		公立%	私立%	平均%
楽しいこと	子位の成長 (教育効果があがる)	36	25	30.5
	子供と遊ぶ、接する事 (純粹性、無邪気さ)	35	37	36.0
	子供に慕われる	2	8	5.0
	その他 (卒園児の訪門、父兄の感謝)	0	3	1.5
	無解答、特になし	27	27	27.0
合 計		100	100	100
嫌なこと	同僚とのトラブル 父兄の無理解な態度	40	25	32.5
	雑用が多い、長時間勤務、低賃金 人手不足からの過労	20	19	19.5
	子供のけが、事故の発生	12	19	15.5
	教育面で思うようにならぬ (不安、自信なさ、情性)	6	15	10.5
	教育設備、教材の不備	0	3	1.5
	無解答、特になし	22	19	20.5
合 計		100	100	100

第42表 転職・移動の希望

	転職・移動とも希望無	移動の希望有	転職の希望有	無記入わからぬ	合 計
公立%	82	2	6	10	100
私立%	75	11	9	5	100

に反し、結果は第42表に示すとおり、「転職・移動とも希望しない」が圧倒的である。そして「移動は希望するが、保母はやめない」という回答も若干あった。これらを含むと、全体の八五%もの人が意志強健に保母を続けようとしているのである。たとえ仕事は苦しくともやりがいのある仕事故に保母たちは嫌な事にもがまんしながらがんばっていると推察される。しかし転職希望が少いからといってそのまま放っておいてはならないはずである。保母たちは現

第43表 保 母 達 の 声

労働条件を良くしてほしい (重労働、長時間、低賃金からの解放)	15人	公立
仕事に対する認識を深めてほしい (国家予算を増加すべきである) (保母に国家の保障を与えてほしい)	12	公立
人間関係を改善してゆきたい (同僚との人間関係) (社会性のない父兄は困る)	4	公立
保母タイプの人間になりたくない からにとじこもるのはいやだ	1	公立
仕事にはりあいを感じている・誇りをもっている	3	公立
幼児保育は大切にすべきである	4	公立
働く母親の役に立ちたい	2	公立
保育所は女ばかりの職場なのでつまらぬ	0	公立
	34人	私立
	15	私立
	10	私立
	7	私立
	3	私立
	0	私立
	0	私立
	2	私立

(自由に記入してもらったものをまとめた)

状に決して満足していないことは既述のとおりである。移動の希望は「幼稚園へ」「民生局へ」「公立保育所へ」などであった。とくに私立で働いている人は公立へ移りたがっているようである。その理由は私立では労働条件、とくに給料が悪いからである。又は身分の保障がない、宗教がわずらわしい等である。なお、転職希望者は全体の一割位いるが、その理由は「他の職場体験を持ちたい」、「保母は一般に労働条件が悪すぎる」、「自分は保母に適していない事に気がついた」等である。転職、移動ともに希望者の多いのは私立である。したがって、公立と私立の格差をちぢめて行くことは今後の保育所政策の大きな課題の一つであろう。

④その他(保母達の声)——調査項目以外に保母たちの自由な発言を聞き、それらをまとめてみた。結果は今まで述べてきた事をくり返していると思われる所もあるが、次のような結果がえられた。第43表に示すように、「労働条件を良くしてほしい」という訴えが圧倒的に多かった。そして「仕事に対する認識を深めてほしい」という訴えも比較的に多かった。他にも色々あるが、中には「保母はもっと保母同志で交流したい」という願いなどは保母の希望として注目すべきものであろう。

## 五、綜括と結論

保育所保母の平均年令は二八・九才、最終学歴は短大卒が圧倒的に多い。これは保母になるために資格を必要とするからである。しかし、私立保育所では無資格者が三〇%もいるのである。これらのうち、若い人は資格取得中の人もいるが、四〇才を越えた人では手伝い程度の、助手として働いている人が多い。保母の平均経験年数は五・四年となっている。中には十年以上勤続のベテラン保母も多い。給料は公立と私立との差が大きく、とくに私立では不当に低い給料である。私立で働く保母のうち約六〇%の人が一五、五〇〇円から一七、五〇〇円であり、一〇年働いても二〇、〇〇〇円に満たない人もいる。そのような低賃金であるので多くの保母は毎月の生活費に事欠いているありさまである。公立の場合は公務員としての取扱いとなっているから私立ほど深刻な問題となっていないといえよう。労働時間は給料と同様に労働条件の大きな要素を占めるものであるが、労働時間に関しては私立よりも公立の方が長くなっている。通常日、早番日、遅番日勤務があるわけだが、遅番日の場合などは一日一〇時間以上もの労働を強いられている。また、保母という特殊な職務のため、家庭にあっても職務のために時間をさくことが多い。このような長時間労働は肉体のみならず、精神疲労を慢性化している。保母の勤務は長時間労働である上に休憩時間がほとんどなく一日中働きづくめであることも注目しなければならない。たとえ休憩時間があつたとしても一〇分から三〇分位で、それも午睡の時に子供と一緒に休むだけであつて、純然たる休憩とはいえない。昼食すらもゆっくり取ることができない。休憩は保育所の場合、人間相手の仕事であるから一斉に休むことは難しいが、交代制の方法で休憩制度を合理化しなければ保母の健康が害されることは明らかである。

保母の疲労の内容は具体的には受けもちによって異なるが、「勤務中、何をしている時に一番疲れますか」という質問では、自由遊び・布団敷き・掃除等の順で訴え率が高い。自由遊びは想像以上に精神的に疲れるといわれている。保育所によっては保母が給食婦・掃除婦・雑役婦・事務員を兼ねている所も珍しくない。一人で二人分も三人分も仕事をしているわけである。保母は子供達と同じ動作をする場合が多く、飛んだり跳ねたりして一日を過ごすことが多いので足・背中・肩という具合に筋肉系統の疲労の訴えが多い。又、喧騒な子供を制して指導教育して行く仕事は精神的に疲れるのみならず、発声器管の障害もおこしている。このような長時間労働、並びに重労働のあとで、保母は帰宅するが、家庭では家事が待っている。それが終ると保育の準備や勉強に追われるのが通例である。したがって、ゆつくり休む暇さえない生活である。

そのような保母生活を続けて健康状態はどうであるかといえ、やはり「悪い」人が二一%もいる。病氣は呼吸器・胃腸障害が多い。これは仕事の過重と多忙、さらに不規則性が主たる原因であろう。保母の疲労は木・金曜日をピークとしてあらわれている。そして暑い夏にかけて疲れがでる。生理中の苦痛について調べると「苦痛がある」の人が半数いる。それにもかかわらず人手不足という理由により、わずか一割足らずの人しか生理休暇を取っていない。とくに保母の場合は生理時の精神的ないら状態は子供に良い影響を与えることはないであろう。その点から一般女子労働者以上に保母の生理時の問題は慎重に考えられなければならない。

以上述べてきたように保母の生活は過重な労働条件の下で身心共に著しい疲労の状態にある。このような恵まれな労働条件にあるので、保母志願の動機を明らかにすることは興味深い。それによると、「子供好き」、「仕事の大切さを知り社会に役立ちたい」という解答が最も多かった。つまり、何らかの目的と信念をもって保母労働に従事して

いるといえる。保母労働での喜びは、やはり「子供に関する事がら——成長ぶりを見る事」である。保育そのものが嫌だという人はいない。労働条件を改善すれば保母の仕事はやりがいがある上に女性の適職として大いに歓迎される性質のものである。保母志願者の減少という社会問題も解決されるのである。現在、保母として働いている人で転職を希望する人はほとんどいない。「たとえ苦しくともがんばる」態度の人が多い。この人達は決して現状に満足してゐるのではなく、仕事への使命感をもっているからがまんしているのである。つまり、保母の犠牲の上で保育事業は進められているといつても過言でない。

本調査によつて明らかになつたように、保母が重労働と低賃金のもとで労働しているのは何故であらうか？ その要因としてあげられることは、第一に保育行政の貧困である。行政面では中央統制の方向へ、財政面では地方住民へ肩代りさせる政策がとられている。つまり、保育所が救貧政策の一環として施策されているためである。「働く婦人よ、家庭に戻れ」「子供の保育は母親の責任」等と宣伝し、婦人の働く権利と、子供が社会的に守られる権利を共に奪い去ろうとしている政策の現われともいえよう。第二に保母の劣悪な労働条件は婦人労働者に共通する問題である。資本主義における利潤蓄積として最もよい方法——男女の差別待遇からくる婦人労働者の低賃金が、婦人だけの職場である保育所にも及んでいるといえる。第三に託児所として生まれてきた保育所の歴史は、徹底的な奉仕精神を要求してきたことを示している。保母は聖職という美名のもとで奉仕精神を強いられてきたことも問題とされねばならない。後でも述べるように保母は教育労働者でなければならぬのである。第四には、社会の保母労働に対する認識の低さも考えてみなければならぬ。したがつて、保母は教育労働者としての自覚と認識のもとに、仕事の重大性を社会にアピールし、更に人間的な権利を訴え、母親や地域の人々と共に改善をめざす運動を展開しなければならぬ

いと考える。

最後に、幼児教育の立場から、保母労働をみるならば、保育所が幼児教育の場であることを強調しなければならぬ。パヴロフ学説による条件反射の研究は、人間誕生後、極めて初期から各種の条件反射が形成され、ことに言語系（第二信号系）の発達する時期が、人格・性格の形成にとって重要であるから、幼児期における教育の意義を明確にし、保母の教育労働者としての地位向上をはからなければならない。

## 六、引用文献

- 1 植田 恭著 「保母の疲労」労働の科学 12巻6号（一九五七年）
- 2 近藤浩一郎等著 「保育所保母の実態について」日本福祉大学研究記要 2号（一九五八年）
- 3 山本順子著 「保育所保母の労働と疲労」北海道労働研究 80号（一九五九年）
- 4 一番ヶ瀬康子他編 「日本の保育」生活科学研究会発行（一九六三年）
- 5 高桑 栄 松等著 「保育所保母に関する労働医学的研究」北海道労働研究 81号（一九五九年）
- 6 徳永寅雄著 「社会と子供」現代保育講座 5 金子書房刊（一九六一年）
- 7 厚生統計協会編 「厚生指標」（一九六五年）

## 附録 保育所保母の実態調査表

——区・公 立  
私 立

保母労働の実態調査

1. 年 令      \_\_\_\_才 \_\_\_\_ヶ月
2. 最終学歴    (中学・高校・短大 (保母学校・その他)・大学・その他 \_\_\_\_)
3. 生活環境    (自家・借屋・下宿・間借り・アパート・寮・その他)  
(家族と生活・友人と・一人で)  
あなた専用の部屋はありますか    (有・無)  
配偶者    (有・無)      共稼ぎですか    (はい・いいえ)  
子供    \_\_\_\_人
4. 経験年数    \_\_\_\_年 \_\_\_\_ヶ月  
保母の資格    (有・無)
5. 園における地位    (主任保母・保母・代用保母・助手・その他 \_\_\_\_)
6. 給料 手当も含めた月平均額 (手取り \_\_\_\_ 円)  
現在の給料でやっていけますか    (大体やれる・普通・時々不足・毎月不足)
7. 勤務について    (常勤・非常勤)  
非常勤の人だけ答えて下さい  
非常勤であるのはどうしてですか    \_\_\_\_  
一週間に何日位ですか    \_\_\_\_日  
\_\_\_\_時から \_\_\_\_時迄勤務  
常勤の人だけ答えて下さい  
通常日    \_\_\_\_時から \_\_\_\_時迄勤務  
早番日    \_\_\_\_時から \_\_\_\_時迄勤務    週 \_\_\_\_日  
遅番日    \_\_\_\_時から \_\_\_\_時迄勤務    週 \_\_\_\_日
8. 受け持ち    (乳児 \_\_\_\_名・年少児 \_\_\_\_名・年中児 \_\_\_\_名・年長児 \_\_\_\_名)  
混合組 ( \_\_\_\_才児 \_\_\_\_名と \_\_\_\_才児 \_\_\_\_名)  
その他の方法 \_\_\_\_
9. 通勤時間    片道 \_\_\_\_時間 \_\_\_\_分  
主な交通機関    (電車・バス・徒歩・その他 \_\_\_\_)
10. 睡眠時間    平均 \_\_\_\_時間  
熟睡できますか    (はい・いいえ)
11. 一日の勤務が終わってから就寝迄、主に何をしますか (一時間以上するもの)  
(休息・家事・娯楽・読書・習いもの・保育に関する準備・勉強・その他 \_\_\_\_)

12. 休日は主に何をしますか

(休息・家事・娯楽・読書・買物・スポーツ、ハイキング・アルバイト・習いもの・その他\_\_\_\_\_)

13. 昨年(39年4月から40年3月)定休日以外の休みを、どの位取りましたか

有給休暇 \_\_\_\_\_日

(病気・家事・旅行、娯楽、帰省・その他\_\_\_\_\_)のため  
取らない人はどうしてですか \_\_\_\_\_

有給休暇以外の欠勤 \_\_\_\_\_日

(病気・家事・旅行、娯楽、帰省・その他\_\_\_\_\_)のため

14. 休憩 どの様な方法で休みますか

(交代制・一斉・午睡の時 幼児と一緒に・勤務中適当に・  
その他\_\_\_\_\_)

何分位ですか \_\_\_\_\_分

15. 食事 朝食は取りますか(毎日取る・まちまち・ほとんど取らない)

昼食はゆっくり食べられますか (はい・まちまち・いいえ)

最近、食欲はありますか (有・無)

16. 勤務中の疲労状態

勤務中何をしている時一番疲れますか

\_\_\_\_\_

一週間で一番疲れを感じる日(月・火・水・木・金・土) 曜日

何月頃が一番疲れを感じますか

(1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12) 月

体のどの部分が疲れますか(二以上も可)

(頭・首・肩・背中・手・指・腰・足・目・のど・全身・そ  
の他\_\_\_\_\_)

17. 最近の健康状態 (良い・普通・悪い)

持病 \_\_\_\_\_

かかり易い病気名 \_\_\_\_\_

18. よく使用する薬品

(ビタミン剤・胃腸薬・風邪薬・頭痛薬・トクホン類・その他)

19. 生理時、特に苦痛はありませんか (有・無)

症状(気分が落ち着かない・腰痛・頭痛・腹痛・イライラする  
全身倦怠感・下痢・胸苦しい・その他\_\_\_\_\_)

生理休暇は取りますか (はい・いいえ)

取らない人はどうしてですか \_\_\_\_\_)



20. 保母生活で楽しいこと \_\_\_\_\_

いやなこと \_\_\_\_\_

21. 保母を職業として選んだのはどうしてですか

\_\_\_\_\_

22. 転職について

現在、転職を希望しますか (はい・いいえ)

希望する人はどのような方面へ転職したいのですか

(他の職業へ・公立へ・私立へ・その他 \_\_\_\_\_)

理由 \_\_\_\_\_

23. 保母生活を通して感じている事を書いて下さい (何でも結構です)

\_\_\_\_\_

24. 自覚疲労 (次に示す様な症状がある場合○を, ない場合×印をつけて下さい)

	A		B		C	
1	頭が重い		頭がぼんやりする		目が疲れる	
2	頭が痛い		考えがまとまらない		目がかわる	
3	全身がだるい		一人でいたい		動作がぎこちなくなる	
4	体のどこかがだるい		いらいらする		ふらつく	
5	肩がこる		ねむくなる		味が変わる	
6	息苦しい		気が散る		めまいがする	
7	足がだるい		物事に熱心になれない		まぶたやその他の筋がピクピクする	
8	つばが出ない		ど忘れする		耳なりがする	
9	あくびが出る		する事に自信がない		手足がふるえる	
10	冷汗が出る		物事が気にかかる		きちんとしていられない	